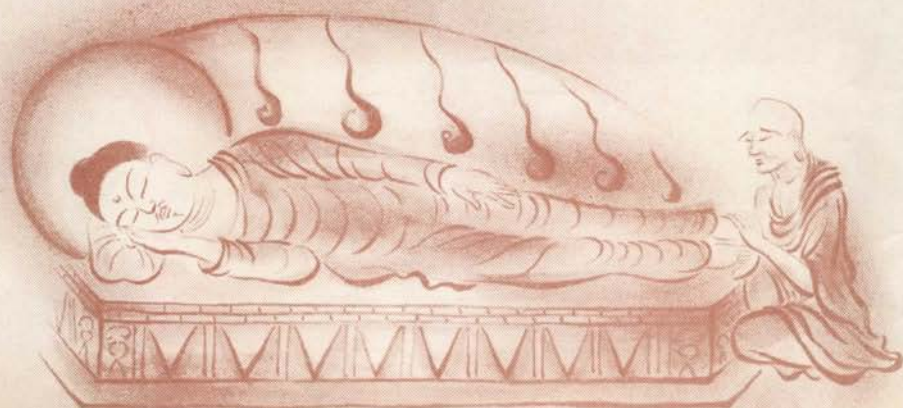


浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運送 (特別取扱承認証) 第三二五号
昭和四十八年一月二十五日印刷 昭和四十八年二月一日発行



第三十九卷

第二号

1973

2



—目 次—

表紙 「釈尊荼毘の図」松涛達文画

開宗八百年に聞く(第一回).....	語り手 塚 本 善 隆.....	(2)
「春」のお歌<2>.....	村 瀬 秀 雄.....	(6)
庫裡に生きぬいた母.....	円 山 富 子.....	(8)
選訳集講話② 題号および文前の標示について.....	戸 松 啓 真.....	(10)
念仏・人と歴史② 法然上人をめぐる人びと.....	伊 藤 唯 真.....	(14)
あの子は二十五歳で逝った.....	高 橋 美 代.....	(17)
仏縁をよろこぶ一九品仏に参拝して.....	野 村 豊 子.....	(19)
霊場を訪ねて《二番礼所・讃岐法然寺》.....	兼 子 正 真.....	(22)
異僧真覚<第十三回>.....	柴 田 六五郎.....	(24)
表紙によせて「釈尊荼毘の図」.....	松 涛 達 文.....	(28)
「道」茂右衛門宅への道.....	高 橋 良 和.....	(30)
浄土宗の国宝(1).....		(32)



汝等比丘、当に自ら頭を摩すべし

佛垂般涅槃略説教誡經、通称、遺教經の一節である。

一説に「汝等、日に三たび摩頂せよ」ともいわれる。出家者は日に少くとも三度、みづからの頭を撫でてみよというのである。僧侶の剃髪は虚飾を捨て、簡素を尊ぶ仏者の基本的心構えの表現であり、日々、おのれの頭頂を撫でることによって、仏者たるの自覚を深めるのである。釈尊が二月十五日「ねはん」されるに当って、最後のいましめとして遺された「摩頂」が、現今のような長髪僧のふえた末世では、これすらもおこなわれないということは、まことに悲しいきわみである。わが愚禿のひがみのみではない。

(S・T)

特 集



開宗八百年に聞く

語り手 塚本善隆

(仏教大学教授・文庫)

〈第一回〉

——浄土宗では開宗八百年を間近に控えまして色々な行事が行なわれているわけですが、本日は塚本先生に個人的立場を含めてお話しをおうかがいしたいと思います。はじめに、先生の生い立ちからまずお話し願いたいのですが、先生は確か在家のご出身であるということですが——

ええ在家です。本籍は愛知県海部郡七宝村で、半農であとは七宝焼を焼いていました。ここは祖父の在所でして、実際はボクは名古屋で生まれたのです。寺に入る動機というのは、五歳の時に父が死にまして……、この父というのは、た

くさんの兄弟の中でも末息子であつたのですが、兄達が当時七宝焼の好景気ということで次々に家を出まして、結局家を継いだのですが、ともかく、父はこの頃すでに肺結核にかかつていたのです。肺病よりも、家の跡取りとしての役目の方が大切であつたわけです。それで、父は肺病のかなり悪い時期に結婚して、ボクが五歳の時に亡くなりました。母は京都の第一女学校を出た人で、当時としてはなかなかハイカラだったようです。一人息子のボクを大層可愛がりまして、早期教育とか申して一日中付ききりの毎日でした。そこで心配

した叔父達のすすめで、ボクは小学校二年の時に、叔父の一人が住職をしていた大阪の寺に後継者ということで引き取られたのです。

——それは大阪のどこですか——

天王寺区下寺町の善福寺という浄土宗の寺でした。

——そこで小僧時代が終わるわけですか——

そうです。そこでまた、ボクをとても可愛がってくれた叔父が今宮中学二年の時に亡くなったのです。その亡くなった時の印象が、仏教に対する一つの関心を将来持つようになった原因だったのです。それは、叔父が病院から退院して来たのですが、よくなって帰って来たのではなく死を覚悟していたのです。いわゆる臨終行儀というもので、北枕に西に顔を向けて、来迎仏を飾り阿弥陀様を祀り、小指から五色の糸を手にかけて、大きな声で常念仏を唱えていました。その上、座敷内では普通の話しは一切しないで、訪れたものも木魚をたたいて念仏を唱えるようにとのことでした。しばらくしたある日、死期の近づいたことを医者から教えられ、ボクはこの日は学校を休んでいました。そして、死の床の叔父の足を持つようにいわれ、その足が冷めなくなったら知らせるよう

にいわれました。事実、だんだん足が冷めなくなって来ましたが、それでも叔父は「南無阿弥陀仏」を唱え続けておりました。この時の印象は誠に荘嚴なものでした。「死が怖くないなんて、坊主というものは全く偉いもんだなあ」と思ったものです。

——それは、十四、五歳の頃であつたと思われませんが、それからはどうだったのですか——

それからなんです。その後実は大変なことがあつたのです。弟子達が大勢いて、いわゆる相統争いが起つたのです。この事件は全くみにくい大人の争いで、ボクは叔父達のはからいで、滋賀県大津市の華階寺というお寺にあずけられることになったのです。その住職が恒川現霊という師匠で、後に釈迦堂清涼寺の住職となった人です。そこで、ボクは膳所中学に移ったわけですが、当時学内では、三高から京大へ進学するというのが風潮でした。この頃、堤先生という気鋭の校長がおられまして、卒業を控えた五年生の時に、「わが希望」というか「わが理想」というか、いわば将来の抱負を作文に書かせたわけです。まだ十七、八歳の学生ですから、みな誇大妄想で夢ばかり大きな理想を書いたわけです。ボクも三高

から京大に入って学者になるなど書いたらしいんです。ところがしばらくたつと、堤校長がボクを呼びまして、学費は面倒見るから三高へ行くようにとすすめられたわけです。ボクは大喜びで寺に帰って恒川師匠に話したのですが、この時、師匠にエラく怒られました。「男たるものが親類でもないものに世話になるとはどういうことか」と。ともかく、親族のものから早く住職の資格だけは取るようにといわれ、仏教専門学校に放り込まれたわけです。

——ああ、これで仏教専門学校へ入られたわけですね——
しかし、仏教専門学校では普通中学から来たものは二、三人で、ボクなどは何を教えられたか全くわかりませんでした。ともかく、卒業すると叔母が待っていました、大阪の赤壁源聖寺の後任住職として披露までされたわけです。しかし、まだ二十一歳のボクに住職の務めができるわけがありません。そこで大阪を逃げ出し、師匠の恒川住職に相談したのです。師匠は賛成してくれまして、学費には田舎の田地を一応親族のものに売った形として経費に充てたわけです。この時、兵隊検査をしたのですが無論通りませんでした。

——それから大正大学へ行かれたのですかね——

まだ宗教大学といっていました。当時研究科へ入ったのは二十二名でした。その頃は全盛期でして、椎尾辨匡、矢吹慶輝、望月信亨、大島泰信、萩原雲米、渡辺海旭というそうそうたる教授陣でした。

——ここでは専攻は何でしたか——

唯識と俱舎が一年交代でして、ボクの時は唯識で加藤精神先生が主任でした。それから驚いたのは、椎尾先生がノートなしで二時間もぶっ続けで講義されたことでした。この宗教大学を終えると今度は京都大学の専科に入ったのですが、その時は、恒川師匠と衝突したわけです。というのは、師匠は当時流行で就職にも都合がよかった英文学を勉強するようにすすめられたのですが、ボクはガンとして印度哲学を専攻したわけです。そこで、仏教美術史を講じておられた助教で沢村専太郎という若い先生に大いに可愛いがられまして、結局その先生のすすめに従って、ボクは印哲でしたが、浄土教美術のものを卒論に書いたわけです。ところが、卒業しても印哲ですから職の口があるわけがありません。しかし、三年の時に羽溪了諦先生が専任の助教として仏教の講義を持たれるようになりました。そして、支那仏教史の第一時間

目の授業に、「支那仏教は全く未開拓で、資料として大日本大蔵経や続蔵経が出版されたわけであり、これを刊行した日本の若い学生の研究は責務である」と話されたことに大いに感激したわけです。そして、資料の取り扱いなどをもう一度勉強しようとう東洋史をはじめ、仏教史を研究して行くようになったわけです。

——この頃、丁度開宗七百五十年だったわけですが、何か印象がありますか——

開宗七百五十年は余り印象がありません。この頃は善導大師の千三百年のご遠忌や、法然上人の生誕八百年などの行事がありました。

——それは何か残るような企画がありましたか——

「知恩院史」の編集などがありましたね。

——今度の開宗八百年に何か希望したいことはありますか——

特に注文したいことは、法然上人を中心とした文書による教化伝導を盛んにしてほしいということですね。最近はそれでも大分書物の出版がなされているわけでもありますが、まだ二祖三祖の影響などにはほとんどしみ渡っていま

せん。宗門の強力な後援がおのずから必要だと思います。また寺院関係者も書物に対する関心がまだまだ薄いということではないでしょうか。出版文化を利用した布教は現在では誠に大切であると思います。

——最後に、先生自身が法然上人の教えを人生観の上でどういう風に生かしておられるか、お聞かせ願いたいと思います——

ボクは自分が学問の道を歩んで来ましたが、法然上人の伝記の中であんなによく勉強し続けた人はいないのではないかと思います。それは念仏の行にしてみても、「生けらば念仏の功つもり」というように、決して生涯止めなかったということです。このように自分が選択した一つの道に、決して怠たということがなく、生涯を打ち込んだ法然上人のお人なりに感動せずにはいられません。

(文責・編集部)

法然上人は、世間にいう歌詠みではなかった。ただ一般の風習にしたがって、法門のことに寄せて詠われたにすぎなかった。勅修御伝にはお歌二十七首を載せているが、上人がご自分で書付けられておいたお歌としては、わずか五首しかのっていない。その他は説明に似た題名が付されている。しかしどのお歌にしても、上人の信仰のほとぼりから自然に生まれたお歌である。

その中で最初にかかげられているお歌は次の一首である。

春

さへられぬ光もあるをしなへて

へたてかほなるあさかすみかな

夜が明けて、太陽がのぼり始めると金色の光りがサツと射しわたった。西の山々の頂きは赤く染め出され、それが次第に山の麓にまで拡ってゆく。しかしながら折から谷々には一帯に霞が深くたちこめていて、まるで太陽の光りを隔てようとするかのように見渡せる。このお歌は今日の快晴を思わせる雄大な景色を詠われた

「春」のお歌

— 2 —



(淑徳短期大学講師)

村 瀬 秀 雄

ものである。

それだけに、このお歌について余り説明がましいことを述べることは、避けるべきであって、お歌のように目前に拡がる大きな景色をうかがえばよいのであるとされている。しかし蛇足であることを承知しながら、また不遜を省みず申し述べるならば、次のような意味になるのである。

妨げられることのない光りというのは、阿弥陀さまの無礙光を指している。太陽の光線はいかに遠くにまで及ぶにしても、距離に従って薄らぐものであり、物があれば影をつくって物の裏には及ばない。阿弥陀さまの光明は太陽・月・電灯その他のように目で見られる光明ではない。しかも仏のお力によって発せられる光明は何ものによっても遮られることがない。だからこそ阿弥陀さまの光明を無礙光と申すのである。

このことについて上人は、「彼の仏の光は十方の世界に徹照せずといふことなし。もし夫れ然らざれば、即ち此の世界

の念仏の衆生は、彼の仏の光摂を蒙ることを得ざるべし」と説かれてゐる。仏さまの光明は智者だからといって、愚者だからといって、聖人だからといって、凡人だからといって少しの区別をするものでない。仏さまの光明は、お念仏を称える者のすべての人を摂取し給う。

春の朝、輝かしい太陽の光りが山々の頂を染め出してゐるのに、谷の方ではこの光りを隔てようとするかのような様子をして霞がたち込めてゐる。お歌の朝霞は、人間の罪業とか妄念とかを喻えたものであつて、人々が罪業を積んだり。妄念を起したりすると。それがいかにも仏の光明を妨げるかのように思うものである。このお歌の下句は、このことを詠われたのであると説明するものもあり、そこまで説明するとは差控えるべきであるという人もある。

朝霞は太陽が高く昇れば、いずれ間もなく消えてゆくものである。それが自然の姿なのであるが、一時ばかり朝霞は太陽の光線を遮るような顔をしているにすぎない。このように説明すると、やはり折角の朝景色のお歌が、理におちる感じが無いとはいえない。

上人は常に次のように仰せられていたという。(勅修御伝第二十一)

「他力本願に乗ずるに二あり。乗ぜざるに二あり。乗ぜざる

に二といふは、一には罪をつくるとき乗ぜず。其故は、かくのごとく罪をつくれば、念仏申すとも往生不定なりとおもふ時に乗ぜず。二には道心のおこる時乗ぜず。其故は、おなじく念仏申すとも、かくのごとく道心ありて申さんずる念仏にてこそ往生はせんずれ、無道心にては念仏す共かなふべからずと。道心をさきとして、本願をつぎにおもふ時乗ぜざるなり。次に本願に乗ずるに二の様といふは、一には罪をつくる時乗ずるなり。其故は、かくのごとく罪をつくれば、決定して地獄に落べし。しかるに本願の名号を唱れば、決定往生せん事のうれしさよと、よろこぶ時に乗ずるなり。二には道心おこる時乗ずるなり。其故は、此道心にて往生すべからず。この程の道心は、無始よりこのかたおこれども、いまだ生死をはなれず。故に道心の有無を論ぜず、造罪の軽重をいはずただ本願の称名を、念々相続せんちからによりてぞ、往生は遂べきとおもふ時、他力本願に乗ずるなり」

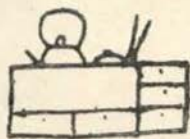
往生し極楽に従つて成仏することができるかどうかは、罪をつくるつくらぬによるのでなく、道心をおこすおこさぬによるのでなくただ仏の慈悲にすがつてお念仏を相続するかしないかによるのである。

ある人が上人に質ねた。朝に夕に、くる日もくる日も心に思うことといへば名聞、利養のことばかりである。こんな生

活を繰り返しているのでは、いかにお念仏を唱えたところで、とうてい仏さまのお心に叶うものとは思われない。すると上人は次のように答えられた。(十二箇条問答)

「わが心をしづめ、このさはらをのぞきて後念仏せよとはあらず。ただつねに念仏して、そのつみを減すべし」

名譽を欲し利益を追うことは、人々の日常生活の姿である。もしこの心をなくした後でなければ、お念仏を唱えられないとしたならば、凡人にとってお念仏もまた遠い路となつ



庫裡に生きぬいた母

円山富子

(浄土宗寺庭婦人会常任理事
京都市下京区在住)

秋晴れの美しい朝、母はこの世を静に去りお浄土にまいりました。

昨日満中陰を無事済ませたのでございますが、私の頭の中は母の思いで一杯でございます。それは母への孝養の出来なかつた後悔や、母につながる思い出の数々の、あんな事こんな事の思いが、私のまわりを埋めつくす様

てしまう。阿弥陀さまは、どんな凡夫でもお念仏を唱えれば救つて下さると誓われているのであるから、この誓いを信じ、帰依して凡人の姿のままでお念仏を唱えるならば、いずれこの身を清めて下さることである。お念仏を唱えることによって、罪障が消滅されると深く信じてお念仏を唱えるのである。

今年もまた上人のお導きによって、明るく力強く歩んでゆきたいものである。

な思いでございます。

母は米屋の娘として生れ、十七才の春寺の嫁としてとついでまいりましたが、父はまば大正大学に在学中で、結婚当時は田舎の山寺に、老僧夫妻とのわびしい毎日だった様です。

慣れない寺の生活は母には辛かった様でしたが、一生

懸命なじんで行くことに努力した様でした。十九才で長女の私を生み、老僧夫妻をお送りしてからのわびしい寺の生活は、察しただけでも楽ではなかった様でした。その上、世帯盛りの四十五才で遺児三人つれて、住職を亡くした寺の嫁としての苦しみを、いやという程味わったのでございます。

母の寺庭婦人として本当の生活はそれからであつた様です。父の死後の母の日常は日の出前に起き、洗面、おつとめ、朝餚、掃除、そしてお詣りの檀家への心配りといった順を、いつにかわらぬ姿で几帳面にくりかへされておりました。それは母が日課として定めたものでなく、一日の独りで生きるため自ら画いた軌跡とでもいえます。その様な姿であるだけに、念仏を称え称え働く母の姿には宗教家としてのやすらぎがみちていました。平凡といえは平凡でしたが、その中には残された子供を育て上げ、この寺を私が守らねばならぬという気魄があり、筋金のおつた緊張した気がこもっていました。私がある日、茶へ心をよせたことも、そうした母の順序ある暮しが持っていた高い緊張感への憧れに影響されたことは確かでございます。茶の勉強を今一度して

見ることを母に相談した時、母はよろこんで、「お茶を習うことによって、お茶に仕組まれた高い美と心を学び、寺の嫁として生きる上に大切なものを身につけることが出来る、お茶をしている人は人の言葉を素直に聞くことが出来、そういうことからものごとの本質を謙虚にみつめることが出来る」というような意味のことをいって、茶の道に入ることをよろこんで進めてくれました。今私は母の勧めもあって、茶の道に精進させて頂く自分を幸せに思い、折りにふれ母の言葉を思い出しております。

晩年の母は仏の給仕にあけくれ、弟夫婦に敬愛されて幸せてした。毎朝のフミダ経一巻のおつとめを朗々とあげ、その声はよろこびにみちていた様でした。

母の死に檀家の皆様は深く悲しみ惜んで、建夜のお詣りは本堂にあふれ詠歌の声は村はづれにひびきました。むつかしいことは知らない母でしたが、寺庭の婦人として生きぬいた立派な花道でした。母は死に際して、私に寺庭婦人としての己れを今一度反省し、もっと真剣に生きることを、教え示してくれた思いでございます。

選 擇 集 講 話

〈第二回〉

題号および文前の標示について

戸 松 啓 真

(大正大学教授)

選 択 本 願 念 仏 集

南 無 阿 弥 陀 仏

往生之業
念仏為先

法然上人の開いた浄土宗の念仏の教えは、日本仏教史という山脈の中でいうと、一つの大きな分水嶺であり、そこから幾つかの河は流れ出し、下流の平野をうるほしてきた。ナムアミダブツというトナエコトバほど、かつて広く日本人の中にいろいろな意味をもって行き渡った宗教的言葉は、ほかにないのではないかと思う。その理由が念仏は称え易いというだけならば、こんなに広く長く続かなかったであろう。それが今日まで続いたということには、念仏にそれだけの深い意味があり価値がある

からではないだろうか。

法然上人が広く仏教のいろいろな教えの中から、この念仏をえらんでその深い意味と価値を教義的にまとめたのが、この『選択本願念仏集』一巻である。勿論、法然上人の御法語や消息には、念仏の教えを端的にのべたものもあるが、念仏の教えを体系的にまとめたものとして貴重な書である。即ち念仏がどのようにして選ばれたか、どのような伝統があるのか、また念仏の申し方などが十六章にわたってのべられている。そして『選択本願念仏集』という題号と「南無阿弥陀仏往生之業念仏念仏為先」という合計二十一字が、本文の第一章の前に書かれているが、この二十一字が法然上人の教えの根本義をあらわしている

し、選択集の結論でもある。本文十六章はこの二十一字の具体的展開であり解説であるといえるのである。

先ず法然上人の説かれた念仏は何かというとき、それは選択本双の念仏である。ただ一般に念仏という時は、口に称える義もあり、心に憶念するものもあり称える仏の名にしても各宗いろいろである。有願の念仏という時は、中国の善導大師が明らかにされた本願他力の念仏である。仏の本願に乗じて救われる念仏である。法然上人の選択本願念仏は、ただの念仏でもなく、ただの本願念仏でもなく、選択即ち阿弥陀仏が選択された念仏という意である。これは法然上人がはじめてとなえられた独自の念仏である。選択というのは、第三章にのべられているように、取捨の意味である。往生成仏のために諸行をえらび捨てて念仏をえらび取ることである。この選択を人間が行なう限りにおいては、相対的価値論の範囲であるが、選択本願念仏の選択は阿弥陀仏の選択であるから、この念仏は絶対価値の念仏であるということができる。(第三章、第十六章に出ず)絶対価値の念仏であるから、私達はその本願他力の念仏に自らの救いをおまかせすればよいのである。悲しい時も苦しい時もみ親(阿弥陀仏)の袖にすがればよいのである。ではこの絶対他力

の選択本願念仏は具体的にいつて何かというと、題号の次にはっきりと示されている南無阿弥陀仏がそれである。しかもその下に法然上人が「往生之業、念仏、為^レ先^一」と書かれたことは三祖良忠上人が『決疑鈔』で註釈しているように往生のための実践行としては念仏が最要であるということである。この六字の南無阿弥陀仏を二祖聖光上人は、結前生後の念仏といった。つまり題号にいう念仏も、これから本文十六章でのべようとする念仏も、全てこの南無阿弥陀仏の六字に帰結するというのが、法然上人の真意である。『選択集』の原本である国宝蔵山寺(京都)本の本文は、安楽房遵西、真観房威成などが筆録したが、この題号等の二十一字は、法然上人が自ら筆を取り墨痕鮮やかに書かれている。

第一章 聖道浄土二門篇について

第一章は浄土宗の教判論をのべたものである。即ち次の章題がかかげられている。

道綽禪師聖道浄土の二門を立てて、しかも聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文

教判論というのは、教相判釈のことで、新しく宗を開く場合には、必ず自分の説の教判を第一に行ない、自分の

開く教えが釈迦一代の仏教の中でどのような位置にあって、いかなる価値があるかということをはっきりさせるのである。先ず第一に法然上人は中国の道綽禪師(657-748)が『安楽集』の中で、釈尊の説かれた仏教を聖道門と浄土門に分けて、この世で自己の力によって修行し悟りに至る聖道門は現代のような悪い時代には適さないからこれを捨て、仏のお力によって救われて浄土に生れる他力の教えである浄土門に帰命すべきであることを鮮明にしたのである。

そもそも人間にはどんな種類のものであっても、みな未来において仏になる本性即ち仏性というものを持っている。それにも拘らず現に生死の苦界に迷い続けているのはどうしたことであろうか。それは大乘の勝ぐれた二つの教えによって生死の苦をはいのけないからである、この大乘の勝ぐれた二つの教えが、聖道門と浄土門である。しかも聖者の自力の教えである聖道門では、今日のような法の時代においては、誰一人その目的を達して悟りに至った者はいない。それは現代が釈尊から遙かな時代であり、その深い哲理を十分に理解できないからである。それに反して、浄土門は阿弥陀仏のみ名を称えることによって御本願の力で救われるから、現代のよう

な人の心も考えも悪い時代には、唯一の救いの道なのである。

以上が第一章の冒頭に引用された『安楽集』の大意である。次に『選択集』の形式についてのべると、法然上人はどの章でも初めに必ず欠典や祖師の論釈を引用し、その後に自分の解釈をしている私釈段といわれるものである。第一章の私釈段において法然上人は、幾つかの重要な主張をのべている。次にそれをのべると、第一に、聖道門というのはこの娑婆世界において自力で悟りに至るものであるから難行道とし、浄土門は、阿弥陀仏の本願の力によって来世に往生して後、悟りに至るのであるから易行道とされた。そして『安楽集』では浄土門とのべられているが、法然上人は浄土門を浄土宗と号して宗を開いたのである。しかしこの浄土宗という名は、自分が勝手につけた名ではなく、すでに中国や朝鮮にその例があると元暁の『遊心安楽通』、慈恩の『西方要決』、迦才の『浄土論』をあげてその証拠としている。次に浄土宗という一宗を開くからには、各宗と同じように所依の經典がなければならぬ。そこで法然上人は、一切經の中から正しく浄土を明す教えとして選んだのが三經一論である。三經とは、『無量寿經』、『観無量寿經』、『阿弥

陀經』であって、これを法然上人が初めて「浄土の三部經」とよばれたのである。この三部經はそれぞれ、説かれていた内容はちがうけれども、その目的とするところは、いずれも念仏往生であるから、浄土宗では昔から三經一轍（さんけいいつごう）というのである。次に一論というのはインドの天親菩薩の『往生論』をいうのである。法然上人は『選択集』では『往生論』を所依の論としてえらんだ理由を説明されていないが、これは三經の通申論であるからである。即ち三經全体にわたってのべられているからである。このようにして、法然上人は全仏教の中から浄土門の教えをえらび取って、その教えの根拠が浄土三部經であることを決定して、ここに新しい浄土宗を宣言したのであるが、これより以前、文治二年五十四才の時には、洛北大原の勝林院において聖道門の碩学と大原談義を行ない、文治六年五十八才の時には、奈良東大寺の大仏殿において南都諸宗の僧を前にして、浄土三部經の講説を行なうに至り、次第に法然上人の浄土に対する圧迫が助わるようになった。その理由の一つにこれまでの各宗とちがって、師資相承の伝灯血脈がないのではないかということであった。ここでどうしても新宗としては浄土の伝灯についてのべなければならぬ段階になったのである。

それが第一章の最後にのべられている浄土宗血脈論で浄土宗の歴史的相承を明らかにしたものである。浄土宗の血脈はこれを次の三流に分けることができる。一に廬山慧遠法師の系統である。二には慈愍三蔵の系統である。三には道綽・善導の系統である。この三つの系統のうち、今いうところの浄土宗はどれであるかということについて、法然上人ははっきりのべていないが、第二章以下においてそれは自明になるのである。ただ道綽・善導流については、さらに二つの区別があることをのべている。一つは『安樂集』に出てくる菩提流支三蔵・慧龍法師・道場法師・曇鸞法師・大海律師・法上法師の相承であり、他の一つは唐宋両高僧伝による菩提流支三蔵・曇鸞法師・道綽禪師・善導禪師・懷感法師・少康法師の相承である。この二つの相承のうち、どちらによるかについても法然上人はのべられていないが、上人は別に『類聚浄土五祖伝』をあらわして曇鸞以下五師の伝記をまとめられているから高僧伝によりのべた道綽・善導流の相承を浄土宗の伝灯相承としたことは明らかである。なお曇鸞以下の浄土五祖の相承が、そのまま高僧伝に出てくるわけではなく、法然上人が両高僧伝の伝記や各祖師の著書によって系統だてたものである。



法然上人をめぐる人びと(二)

— 観覚・源光・皇円・叡空 —

念仏人と歴史

伊藤 唯真

(仏教大学助教授)

本国の明師はかえって弟子となり、黒谷の尊師はおして軌範となす。(知恩講私記)

法然上人には四人の師匠があった。本国美作みささかでの本師と、比叡山での三師とである。

本国の師は菩提寺の院主智鏡房観覚である。菩提寺は上人の生家から北東へ約四十キロ、因幡の国に接して聳える那岐山の山腹にあり、院主の観覚は上人の母秦氏の弟で、もと延暦寺の僧であったが、南都に移って法相を学び、得業(僧の学階の一つ)となった人である。

源内武者定明の夜襲で一家没落の悲運に遇った九歳の法然上人は、「敵をうらんではない。もし遺恨を結

べば世々その仇はつきないであろう。はやく俗をのがれ家を出て、わが菩提をとぶらうように」との父の遺言を心におさめて、ただ一人、奈岐山中の叔父観覚の許に身を寄せたのである。

心に大きな傷をうけた少年を迎えられ観覚は、俱舎論の頌の音読を授けるなど(選択集秘鈔)僧侶への準備教育を始め、その成長を暖かく見守った。少年・法然上人はこの観覚得業の膝下で数年間を過し、仏教に対する関心を深めたのである。

教えればたちまち習熟する少年に非凡な能力があるのを逸早く見抜いた観覚は、辺鄙な田舎で才能を朽ちさすことを惜しんで、比叡山で本格的に修学すため、上人

を西塔北谷の持宝房源光の許に送った。時に上人十三歳とも十五歳とも伝えられている。観覧から源光への送り状には「進上、大聖文殊像一軀」と書かれていた。文殊像とは法然上人のことで、智慧のすぐれたことを示す心がこめられていた。

学府・比叡山での最初の師源光も、法然上人の器量が抜群であるのに感嘆し、もっと碩学につけて天台宗の奥義をきわめさせた方がよいと、間もなく東塔西谷の功德院皇円の室に上人を移らせた。

登山後第二の師たる皇円は『扶桑略記』を著わした高名な学匠である。栗田関白藤原道兼の五代の子孫で、兄の資隆が肥後守であったところから肥後阿梨園ともよばれ、また甥に法然上人の高弟となり、上人歿後の専修念佛教団の中心人物となった隆寛律師が居た。

法然上人は久安三年（一一四七）十一月、十五歳で大乘戒を受け、出家の本意を遂げられた。ある時、皇円阿梨に隠遁の志を告げられたところ、まず六十巻を読んだから隠遁の本意を遂げるように諭され、閑居をねがうのも名利を避けて静かに仏法を修学せんためであるから尤もな仰せであると、十六歳の春かな天台大師智顗が著わされた天台三大部——『法華玄義』『法華文句』『摩訶

止観——の勉強を始められ、三箇年で読破されたという。その精進と秀逸のさまに目を見張らされた皇円阿梨は「学道をつとめ大業をとげて、円宗の棟梁となり給へ」と励まされた。

しかし、この修学も名利の学業であることを厭われた上人は、久安六年（一一五〇）九月、西塔黒谷の慈眼房叡空の庵室を訪ねられた。この黒谷上人叡空が法然上人最得の師である。法然上人が、幼き昔から成人の今に至るまで、父の遺言忘れ難く、つねに隠遁の志が深かったことを告げられると、叡空上人は、少年にしてはや出離の心をおこすとはまことに法然道理のひじりであると喜ばれ、法然房の房号を与え、比叡山での第一の師である源光の上の字と叡空の下の子をとって、源空と名づけられた。法然房源空がここに誕生した。

黒谷は隠遁の念仏ひじりが集まる別所であった。法然上人は遁世の求道ひじりの中に身を置かれたわけである。叡空上人は融通念仏を開いた良忍上人から円頓戒を相承され、戒師としてその名が高かった。右大臣久我雅定の出家の戒師はこの人が勤めた。もちろん法然上人の受戒の師範は叡空上人である。

黒谷に移った法然上人は衣食を叡空上人に扶持され、

住房を師と南北に並べていた。叡空上人は治承三年（一一七九）に亡くなられたが、承安五年（一一七五）比叡山を去るまで二十五年間、門弟として法然上人を学問的にも経済的にも世話されたのである。法然上人は出離の道を求めて黒谷報恩蔵に入り、一切経を三度まで開かれたが、この報恩蔵は、慈恵大師のお弟子で黒谷僧都とよばれた禅瑜僧都の法蔵で、諸宗の論疎鈔物が収められ、叡空上人がこれを伝領されていたのである（良忠「決疑鈔裏書」）

法然上人は叡空上人に近侍し、師と仰ぎながらも、学問上のことに關してはなかなか譲歩されなかった。こういうエピソードがある。『往生要集』を講義した叡空上人が、往生の業としての観仏と称名の優劣に論及され、観仏の方がすぐれていることを述べられたところ、法然上人は称名の方が優位であると反論された。叡空上人が「先師良忍上人も観仏がすぐれていると仰せられた。御房は誰れから相伝して称名の方を採るのか」と追及されると、法然上人は「このことだけは師命に従えない。経論章疏は序題にたちかえて料簡するのが故実である。『往生要集』の序には念仏の一門に依る云々とあるではないか」と応酬し、ついに立腹した師が木枕を法然上人

に投げるといふ一幕があった。後日法然上人の立義が文意に適っていることを悟った叡空上人は、この書を講義するよう法然上人に慫慂された。法然上人は源信の『往生要集』を先達とされていただけに、文意の汲み取り方は確かであった。また戒体をめぐっての論争もあったが、最後は法然上人の立論に心服された。叡空上人のこの仏法に私なき態度はまことにさわやかである。かくして叡空上人は弟子の法然上人を軌範とされ、黒谷の房舎聖教を譲られた。当時の碩学で叡空上人の受戒の弟子でないものはないのに、その師がかえって弟子となられたことは不思議のことだと語りあわれたことであった。

本国の師である観覺得業も、上人の浄土開宗後、齢七十を越えていたが上洛し、上人の弟子となったという（醍醐本別伝記、知恩伝）。『法然上人行狀繪図』も「最初の師範なりし美作の観覺得業も弟子になりて、源空を戒師として受戒し給き」と記している。

肥後阿闍梨皇円は嘉応元年（一一六九）、上人三十七歳の時に亡くなられたが、法然上人はある時弟子に次のように物語られた。師の肥後阿闍梨は智慧深遠の人であったが、生死を離脱しがたいことを知って、遠江国笠原庄の桜ヶ池に大蛇となって潛み、慈尊の出世を待とうと

された。死に臨んで池の水を乞い、掌中に入れてなくなれたが、時を同じくして池では風なくして浪にわか立ち、池中の塵を悉く払い上げたという。阿闍梨は浄土の法門を知らずしてこの意樂をおこされたのであるが、その時自分がすでに加土の法門を尋ね得ていたのなら、信不信を顧みず、この法門をお授けしたものを、と。この話は最も古い伝記である『源空聖人私日記』や『法然上人伝記』に出ている。

このように、師すらも弟子の法然上人を敬重されたが、他宗の碩学で上人に帰伏され、師弟の礼をとられた

方もあった。法相宗の藏俊、三論宗の写雅、華嚴宗の慶雅などである。されば隆寛の『知恩講私記』には、師範たるべき人にかえって上人を尊崇された方々のことを、「本国の明師（観覚）はかえって弟子となり、黒谷の尊師（叡空）はおして軌範となす。興福寺の普徳（藏後）は仏陀と称して供養を展べ、東大寺の長老（重源）は和上となして円戒を受くと讃嘆されている。これ偏えに上人の智慧拔群にして、それも名利にあらずして無上道のための智慧であったからである。



あの子は二十五歳で逝った

高橋美代

（横須賀市芦名在住）

「あすの命はわからない」と人が亡くなる度によく言われますが、はるかよそごとと聞いていました。だが私の長男は、その運命に出合ってしまったのです。元氣一

つばいの二十五才の若者は毎朝「行って来ます」と車で三十分程の会社へ出勤していました。昨今の交通戦争の世の中で毎日交通事故そればかりが心配でした。でも

夕方には定った時刻に元気よく帰って来ました。一滴のお酒も飲めない長男は、食卓に私のしつらえたアイスクリームを、むさぼるように食べるのです。

十一月二十一日の夜いつもの通り食事を終えテレビを見て弟妹を交えて歓談の後、二階の自室の床に入りまして。

それから間もない頃「体がしびれる!!」と隣室の弟を呼び起しました。私たちが掛けつけた時には、すやすや眠っていました。

今の今まであんなに元気に話していたのに……。手のつけようがありません。もっともっと大きな病院へと思っても動かすことが出来ません。医薬もつけつけない。すやすや眠り続けております。なんとも手のつけようがありません。

こうして二十二日の朝、発病以来僅か十余時間で脳内出血という業病は二十五才という若い生命を私共両親と二人の弟妹の眼前で奪い去ってゆきました。

私は長男の胸にとりすがって泣きました。安置された棺にとりすがって泣きました。どんな悔みの言葉も、つるに聞けばかりでした。壺に納められた遺骨を抱きしめ

て泣きくずれました。

仏壇を求めて四十九日の間、遺骨を自宅に祀り生存中と同じように私共と同じ食事を供えて一諸に食事をしました。……けれど私の毎日はずるな、あけくれです。灯明を献げ、お線香を薫じつとも晴れやらぬ私の心です。

やがて四十九日、それは小春日和の暖い日でした。お骨をかかえて本堂に進む。階前の大銀杏の葉が金色に染ってまばゆい程でした。

ご住持のご回向の後、僅か十分程の法話でしたが、
「あなたの御長男の肉体は大地に還ったが、本体は私の下で生きておられて、お念仏の声のするところに現われるのです。銀杏の葉は大地に還っても生命は生き生きて来年亦、芽生えるように——」と。

通夜の席での法話も聴聞した私でしたが、新しく、つらえた、墓地に永遠の安住の地を得た長男の埋骨式を終えた今日始めて安らぎをとり戻して、すなおに御住持の法話が受けとれました。

長男の死にあって始めてほんとうの此の世の姿を知り、生命の尊さを深く感ぜしめられたのです。

仏縁をよろこぶ

―九品仏に参拝して―

潮会（教養を目的の会）で九品仏に伴れて行って頂いたのは丁度涅槃会の二月十五日であった。寒明けの寒い日の続く中でこの日許りは、ぬける様な蒼空と暖い陽射しに恵まれた早春の心もなごむ様な日であった。

雑沓の席から数歩離れた所に、こんなにも静寂なそして素晴らしい所があるのかと先づ驚かされた。私は珍らしくゆったりとした気分になって山門への道を漫步した。

予定より早く着いた気楽さもあって、木立の道の正面に見える山門を見事だと感嘆の思いを持って眺めている時、静かな辺りに警笛の音のするのに気付いた。鎌倉からの一行のバスの到着だ。大急ぎで走り御玄関で一緒にあって御座敷に入った。御寺は寒いものと決め込んでい

た私は檜の香も真新しい暖房も行き届いた御部屋は、私達を迎えて下さる準備も既に整っていた。何から何までの御配慮で一応の御話はこのお部屋で伺い、その後で見学させて頂けるとの事でありがたかった。

御住職が丁度御不在の為、小石川の遠田上人が説明にいらっしやって下さった。

九品仏の名は何度も耳にはしていたが初めて詣でて見て本当に驚いた。昔は奥沢の豪族のものであったと云う境内は、日本にも中国にも珍らしいと云われるもので三万六千坪を数える見事なものである。

珂碩上人が観無量寿経を地上に現わそうとされたと聞く、山門は辺りの木立にその容姿は一段と莊重なを加え

野村 豊子

（東京都渋谷区在住）

る。三仏堂は上品堂、中品堂、下品堂と三つの御堂から成る。各々に上生、中生、下生と三昧づつ全部で九昧、これが九品仏の名の由来かと思われる。

来迎会は本堂の釈迦堂、これを彼岸とし、上品堂を彼岸に、この間に橋がかけられ、北は水の川、南は炎の川、中央が境門になっている。この橋を珂碩上人を中心に廿五面の菩薩の面を被った信者が三度渉る。浄土を生きている時に見せるのが来迎の教えとか、

仏の境涯になったら三界苦の世界に来て人の手を引いて導いて行くのが九品仏の大切な点である由。

死後仏教学から云うと五段階がある。

一、現時点

二、夢、幻を見ている様な状態現次点

三、幽時点

四、靈界

五、如来界

以上の五段階を通ると悟って仏となり迷う事がない。

三段階と四段階に居る時が一番迷う。恐山の口寄はこの幽界と靈界にいる人を呼び出して、こちらから押し上げる、これが追善の意味で済度には如来の御力を借りなく

ては出来ないとの事であった。

常に耳にする追善が、仏教学から云ってこの様な意味を持つている事、をこの時初めて教えられた。又機根と云う言葉を初めて耳にした。機根とは桜の木は桜にしかなれない、人間は人間でそのままで仏にはなれない機根があつて罪深いものだと同った。

浄土宗は自分が砕かれ、自己反省に依つて救われるのであるが機根の故に下品中生に生れた者は下品中生のままであるが仏縁に依つて救われる。仏に成ると云う事が如何にむづかしいかを説いているのである。

以上が九品仏で誌した私のメモと記憶している事を纏めて見たが、原稿の依頼を受けるとは思つてもいなかつた事故、誠に粗末なものでお恥しい次第。その上全くの門外漢で理解も間違っている事も多々ある事と思ひ、話される事を急いでメモするので専門用語などに誤字も多い事と思うが、私は何でも知り度いので、折があったら御教へ願ひ度いと思つている。

来迎会の廿五菩薩の御名を伺つたら、巻物を出して下さつたので私はそれを写し取つて来たがその巻物には廿七菩薩の御名が誌されていた。読めない字、聞いた事の

ない御名があったし又私の知っている御名が無かった。

観音菩薩は三十三鉢あるとの事、それぞれに御役目と云うか御使命と云うものを御持であらうに時間がなくて伺えなかったのは残念であった。そして何故この廿五菩薩が来迎会に選ばれているのかも知り度かった。

上品堂を開けて説明して下さった僧侶の方は自称生臭坊主、とても話の面白い方であった。

「人間四苦八苦と云いますが四苦とは何だか知っていますか」

と云われたので私は「老、病、死、苦」と答えた。

「よく知っていますね」

「ハイ、いつも四苦八苦していますので持ち合せが沢山あります。」

などと無駄口や冗談すら出る様な雰囲気。一般的に私などは聖人君子には近寄りたいたい方、否敬遠したくなる方なので、聖職者と云えども先づ人間である事は人間相手に説く上に大切な事なのだと泌々感じた。

又、文学の上でしか知らなかった沙羅双樹を涅槃図でその意味を知らされた事は興味深いものがあつた。

いづれにしても宗教が長い歴史の中で果して来た役割

は素晴らしく、偉大なものである。特に美術、建築が今日

歴史を経て我々に残されて来ている物の根源は殆んど宗教に依るものと云つても良いのではなからうか、追善、供養、死者の霊の弔、献納、寄進等の信仰心の現われからだと私は思う。日本の美術や建築は仏教信仰に依つて静寂、荘重なものを我々に伝え、ヨーロッパの美術や建築はキリスト教にその源を発し、絢爛豪華なサンピエトロ寺院、シスチン礼拝堂などが残されているピラミッド、スフィンクス、アンコールワット、カタコンベ（地下墓地）シナゴグ（ユダヤ教寺院）皆宗教信仰に依る遺産である。

考えると不思議な思いのする事は、何故御釈迦様の聖誕の地印度で仏教が哲学にとどまり宗教として受け入れられなかったのか、又ユダヤでキリストが生れられたのにユダヤ人はキリスト教を受け入れていない。何故なのだろう。この辺りに人間の罪の深さがある様な気がしてならない。

御寺様の御厚意の御手造りの御昼食を頂き多くの事を学ばせて頂き、何時も乍ら潮会の有意義な恵まれた一刻を満ち足りた思いで感謝しつつ帰路に着いた。

冬のどんよりした北風の強い日であった。私は、金比羅さんから高松への途中、道に迷い、車を止めて地図を見ていた時、その目を前方のとある寺の山門に移した時、その端にある古びた一つの石碑を見つけた。



——本堂と境内——

霊場を訪ねて

二 番 札 所

〈讃岐 法然寺〉

「南無阿彌陀仏 仏生山……」
と記されていた。この弘法大師信仰の厚い四国の地にも浄土の法燈は広められているのだなと思った。そして、そのこと
がある意味で、私の心をなぐさめてくれた。というのは、前

日、私は、土佐に流された時、法然上人が住したという伝説のある甲浦の超願寺に行つて、その荒廃しているのに深いシヨックを受けたからであった。そこは、たった一つ小さな庵が建っているだけの村の共同墓地になっていたからである。

兼 子 正 真

——鐘楼門——



そして、私は、そのとある寺へ参詣するお遍路さんに、仏生山への道をたずねた。聞くと快く、その年老いたお遍路さんは道を私に親切に教え、寺の中へ消えていった。
仏生山は、高台にあった。こんもりとした森につつまれ

いた。山門をくぐると、右手に十王堂、左手に讀岐十景に数えられる美しい池がある。そこを過ぎると、黒門、その正面が仁王門（浄土宗寺院で仁王門があるのは珍しく、住職の話によると、この近くからの移築によって、この寺が作られたからであろうとのこと）ずっと奥の方に報恩堂、右手には、鐘樓門、その後、三仏堂、本堂、庫裡がほぼ横一列に並んで見える。

このお寺は、法然上人が、当時の旧仏教者から排斥され、弟子供々罰せられた、世に云う建永の法難（一二〇七）の時、配流された小松の生福寺の跡に建てられた寺である。現在の伽藍は、今から三百四十年前、寛文八年（一六六八）に、徳川家康公の孫にあたる高松藩祖松平頼重公によって再建されたものである。この寺の現在の正式な名は、仏生山来迎院法然寺といい、法然上人二十五霊場の第二番札所として、浄土の名刹の一つに数えられるお寺である。

私が訪ねた前日と前々日（十一月二十七日、二十八日）にこの寺の重要な行事の一つ報恩講が厳修される。この法要は、法然上人がこの地に配流された時、弟子の親鸞聖人が身代りにおともさせたという自作の像をおまつりするものである。それには、近郷の信者の多数が参詣し、かなり大きな法要である。（住職説）私は、この報恩講が法然上人ではなく、

親鸞聖人に対してのものであることから、この寺が、真宗とかなり密接な関係を持っていることが理解できる。その理由としては、この地方には、浄土宗寺院が極めて少なく、逆に真宗寺院が多いことによることだけだとどめ、このことについては、別の機会に述べたい。

現在ここには、竜雲学園という精薄児収容施設があり、若住職がその困難な仕事と真剣に取り組んでおられた。そのことは、若い同世代の私でも僧侶に対し、何かを教えているような気がする。それは、私には次のことのように考えられる。それは、仏教の僧侶というものが、仏教の教義理解にとどまるものでなく、仏教思想を自己の基底として、大衆と共に生きるということである。それは現代の若者のように、この世の悲しみから逃避するのではなく、真にそれらと対決してゆくことを意味する。云いかえれば、人の苦しみを自らの苦しみとして受けて立つことである。そう私が考える頃には、この讀岐の法然寺にも、夕やみがせまり、東の空には、月が出ていた。その月は、冬らしく、寂しく、青白いものではあるが、清純なものであった。そのとき、宗歌が、若輩の私の心の中にも思い出された。

月かげのいたらぬさとはなけれども

ながむる人のここにぞすむ（続千載集）

「噫々、俺は何という馬鹿者だ。今になってやっと気がつくとは。何も彼も妙春の計算づくだったのだ。俺は彼女の計略にうまうまと引っかかって勝手に悩み、もがいて来たのだ。その俺を彼女は、じっと観察しながら、楽しみ、挑発して結局肉の地獄に引きずり込もうとしていたのだ。而もあんな美しい顔で。餓鬼だ。色餓鬼だ。外面女菩薩内心女夜叉とはまさしくあれのことだ。いや、まあよいわい。明日はもう妙春とも、師匠とも、そして八年住んだ此の寺ともお別れ



＝善住寺山門附近＝

異僧眞覺

第十三回

柴田六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

だ。あーあ夢だ夢だ、人の世は何も彼も夢だわい。今日迄育て上げてくれた和尚には済まぬがもうどうしようも無い。不肖の弟子とは俺のことだ。和尚さん済まぬ」

錯乱する心と覚束ない手付で彼は身の廻りの整理にかかった。そうしながら――和尚に一体どう詫げればよいのか？此処を出て、さて何処へ？――思案のつかぬまま夜が明けた。手洗を済ませる和尚の気配をうかがった彼は充血した目を伏せてその前に小さく座った。

「朝早よから何じゃ？」

何のこだわりも無さそうな和尚の声に思はず顔を挙げたがその眼はすぐ畳に落ちた。

——和尚は何も気付いてはいないのか？ いやそんな筈は無い。では何故わざととぼけているのか？ 俺を試しているのだ。まあどっちでもよい。どうせもう何も彼もおしまいだ。謝るだけは謝って行こう。

「実は……」

とちよつと吃った。

「実は女犯を致しました。誠に申し訳ございません。今日限りお暇を頂き度いと存じます」

一気に言った。

「うん。その事か」

和尚は別に驚いた風も無く言った。

「まあそれは有り勝のことじゃ。暇を取るの何のと、そこ迄気にせんでもええわい。それより子供の出来んようにせいの。尼の腹がでかくなるのは一寸みともないでな」

意外な師の言葉に驚いた彼は、まじまじと和尚の顔をみつめた。

「実はな、俺も若い時そういう事があったのじゃ。そういう事があって始めて人間というものが解るのじゃ。人間の愛

というものがな。人間の愛と憎しみと云うものが解ってこそ、み仏の**ほとけ**大悲というものが解るのじゃ。どうやらお前も一人前の人間の仲間入りが出来そうじゃ？」

然し彼にとって、和尚の言葉は理解の外にあった。

「やっぱりお暇を頂きます」

「此処を出てどうする？」

「判りませぬ」

「行く当てもなしに出て行っても野たれ死じや」

「はい。でも、若し死んでも仏罰と思つて諦めます」

「馬鹿者っ！ 仏様が罰など与えられるものか。一体そんなことがお経の何処においてある？ まあよく考えてみよ」

怒った和尚も、終りの一言だけは穏かに言いのこして本堂へ上って行った。

部屋に引きさがつて、机に頬杖をついた彼は、和尚の言葉をあれこれと反芻してみたが、愚者の一徹とでもいうのか、此の寺を出ると云う一事については、既に自己の意志を動ぬものとしていた。

（俺は女を犯したと言つた。ついそう言つてしまつたが、あれは犯そうとしたと言はねばならぬ処だ。実際には犯していないのだからだがあの時もし和尚が帰つて来なかつたら？ やっぱり犯したのと同罪だ。俺の罪には何の変わりも無い。犯

したと言ったのはあれでよかったのだ。だが、和尚が一向に怒りも叱りもしなかったのは何故だ？ 真覚は到底一人前の和尚にはなれぬ。経を読んで祈禱や寺の掃除、留守番が出来れば上々で、説教も出来ねば、学問を深めるだけの器量でもない。戒律を守って厳しい修行を積む必要も無いのだと。そうだ。きっとそう考えて殊更叱りもせずに、あんな事を言っているのだ。やっぱり俺は人並みではないのだ。だが今更それを嘆いてもどうにもならぬ。そして、和尚は兎も角、仏の戒めを破った俺は仏に詫びねばならぬ。償えるものかどうか解らぬが」

彼は終日兎角の思いのどうどう廻りを繰返していたが、そう気付くと暗闇の本堂に入った。本尊の前に灯を点じ、我無沙羅に念仏を唱えた。座ることに馴れた足の痛みも通り越し、二刻（四時間）も経つ頃には声が嘎れてしまった。それでも声を励まし励まし念仏してついに夜が明けたが、本尊の阿弥陀如来の尊容は、彼のひそかな期待に反して、何の反応も奇瑞も示してはくれなかった。

朝の勤行に上堂して来た和尚は、

「よく念仏申した。真覚、お前存外見どころがあるぞ」と満足そうに言った。然し彼の心は変らなかつた。

「和尚様永々と御厄介になりました。誠に勝手でございますま

すが、今日お暇を頂戴致します」

和尚は驚いた。

「やっぱり行くか？ そうか。まあそれもよからう。人間何処ででも修業は出来る。人の一生は何処で何をしようが皆修行じや。が行く先の当てはついたか？」

「勢多へ参ります。私の在所でございます。善住寺という小さな寺がございしますが、永く住職が無いと聞いた事があります。其処なら入れてくれようかと思ひますで」

「そうか。ならよい。一寸待てよ」

居間に戻った和尚は紙包みをもって引返して来た。それを真覚の膝近く置くと、

永い間。そうじゃもう八年にもなるのう。いやいや永い間御苦労じゃった。少いがお前の給金じゃ」

予期せぬ彼は驚いて押し戻した。

「とんでもない。俺は和尚さんのお蔭でどうやら恰好だけでも一人前の坊主になれました。それにこんなことをして、給金など頂けた義理ではございませんぬ」

「まあ取っておけ。給金が気に入らねば、これは餞別じゃ」

「いや、餞別でも……」

「此の阿呆っ！ お前は最後の最後まで師匠に盾つく気か」



真覚は畳にひれ伏した。和尚は言葉をやわらげて言った

「その寺で若しうまくゆかねば又戻って来い。相談に乗ってやろう」

師の配慮に溢れそうになる涙をこらえて金包を押し戴くと真覚は、昨日まともておいた身の廻りの品を肩に振り分けて門を出た。烏丸の通りを北に折れる時、彼は寺の方角に向って掌を合せた。門の側に和尚の姿が小さく見えた。

六角堂の本尊如意輪観音の前に端座した真覚は動かかなか

た。天明の火事で堂は建て替えられたが難を免れた本尊は元のままである。万福寺の竟空院主に連れられて此処に詣でたあの日から、丁度八年の歳月が流れていた。その八年間を彼は静かに回想していた。十五歳の智慧のおくれた漢垂れ小僧を大竜和尚のもとに送る竟空の心中を思はない訳にはゆかなかった。自ら僧名を与えた真覚。真宗の僧として育てることの出来なかった真覚。改めて宗旨の異なる勤行を習はねばならぬ真覚。田舎から町中へ放り出される真覚。院主の胸は痛んだに違いない。道のついでとはいえ六角堂に祈念をこめねばならなかった院主の心が、今にして思い計られる真覚であった。彼は改めて掌を合せた。それは院主の心に向って合はされた掌であった。如意輪の向うに院主がいた。欄高い声に辟易しつつ経を教えられた妙信。癆咳を病んだ彼女はその後一体どうしたのだろう。妙春に尋ねることもなかった自己の薄情さが我ながら情無いものに思はれた。妙春。その名を思うと彼は鉢中が熱くなった。(俺は如意輪様、貴方の導きで大蓮寺へ来た。そして妙春の裸形を見てしまった。妙春の鉢を見て俺は如意輪様を想い起し、貴方のお姿を彫ろうとした。貴方のお姿を彫ろうとして寺を出なければならなくなった。何と皮肉なことであろうか。いや彫ろうとしてではない。彫ろうとして俺は途中で足をふみ外してしまったのだ。

涅槃會、二月十五日、釈尊の入滅した日を追慕するために寺々で法会が行われる。

長阿含經遊行經第二（大正新修第一卷阿含部上十一頁）によると八十歳を迎えられた釈尊は、入滅の時の近づいた事を自覚されて、靈鷲山を出られクシナガラ地方に向かわれた。途中、舍利弗と目連の入滅に会われた後、阿難に三ヶ月を過ぎて涅槃に入ると予言され、道中到的所で説法された釈尊は、背に烈しい痛みを覚えながら、ヒラニヤヴァティー河を渡り、クシナガラ城の郊外のヒラニヤヴァティー河の岸に立たれた。水が三方に廻っている角の岸の娑羅雙樹の林を指さされ、「阿難よ、汝は彼の林の端に娑羅雙樹が並んでいるのが見えるであろう。彼処へ往って座を敷き、私を北に枕させて臥させてくれ、私は大変疲れた。今日の夜中に彼処で涅槃に入るであろう」と云われた。林への数里の道のりを二十五回も想をとられ、ようやくに林に入られた。頭を北にして西に向い、右脇を牀につけて、足を

表紙によせて

釈尊茶毘の図



—東京台東区最上寺住職—

松 濤 達 文

重ねて静に横になられた。しばらくして又、法を説かれた釈尊は

「汝ら、静まってくれ。もの言うてはならぬ。時が来た。私は滅度するであろう」と言われ静かに禪定に入られた。その時、天上より降りられた母摩耶夫人を拝まれて、終に涅槃に入られた。比丘たちは悲しみに堪えないで、胸をうって咽ぶものあり、地に倒れて悶える者もあった。阿難から伝え聞いたマツラ城の人々は走って来て、悲しみながら宝輿を造り、その上に遺体を安置し香を焚き、華を供えて樂を奏し、また頌を歌った。一日を終えた後、七日七夜の間マツラの人々は厚く最後の御供養をした。七日後、金棺に移し奉じて、城中を通り、静にヒラニヤヴァティー河を渡って宝冠寺に來た。そして寺の殿堂におろし、中庭に梅檀と薪を積み重ねてお棺をその上に遷し、香油を灌いだ。比丘、比丘尼、男女の信者をはじめ、すべての人々は皆泣いた。マツラの大臣は、大きな

炬をとって薪に火をつけようとしたが、薪は燃えない。三度もくりかえしたが燃えなかった。人々は怪しんでそのわけをアヌルッダに問うた。アヌルッダは「多分摩訶迦葉尊者をお待ちになるためであろう。迦葉は、今、釈尊を拝もうと思つて此処に來かけている。このために釈尊が火がつかないようにせられるのであらう」といった。

摩訶迦葉は、タクシヤナギリの國で法を伝えていたが、釈尊が涅槃に入られたことを聞き、五百の弟子と一しょに、バーヴァーを通してクシナガラに急いでいた。途中一人の男に往きあつて、釈尊は七日前に入滅なさつたことを聞き知つた。急ぎにいそいでようやく寺に着いた迦葉は、お棺が薪の上に在るのを目の前にして、泣いて堪えることができず、三度もその周りを廻り、進んで御足を拝して頌を唱えた。

(一) 如來の智は測りがたし。妙にして世に超えたもう。
我今伏して並びなき仏の智を礼し奉る。如來は至上にして瑕と穢となく、寂に欲の枝を断ちたまえり。人天の尊者なり、我今伏して此人天の雄者を礼したてまつる。

(二) 苦行も及ぶものなく、執着を離れて人を教え、染なく垢もなし。我今この仏に敬礼し奉る。

三垢はすでにつきて空寂の行を楽しみたもう。二なく又傳なし。我今この十力の尊者に敬礼し奉る。善く諸の惑を去りて最勝尊となり、四諦の真理を覺りて、ここに息いたまえり。我今この安穩の智者に敬礼し奉る。

(三) 無上の尊者にましまして邪をかえて正しきに向わせ、静寂の地に入らしめたもう。我今この行迹に敬礼し奉る。苦熱なく瑕なく、其の心、常に寂定にして、穢なく智慧の眼を具え限りなく。甘露の教え広くたたえられ希有にして思い識りがたし。この無比の尊者に敬礼し奉る。

(四) 獅子吼をなされ、諸の邪見を畏れしめ、魔群を降して、四性を超越されたもう。この故に私は敬礼し奉る。

迦葉が此頌を説き終つた時に、火は燃えててお棺を焼き、ただ舍利だけを遺した。しばらくして雨が地を洗つた。涅槃に入りたもうた時よりも人々は一そう痛ましく悲しんだ、と記されている。

迦葉が御足を拝し、頌を唱え終つた時、火が燃えだした茶毘の様子を絵に表わすことにより、仏陀の徳を偲び、追慕の意をあらわしたく思った。

道

茂右衛門宅への道

高橋良和

法然上人が比叡山を出て最初に訪ねたのは、京都の西山広谷の地であることは、先にも述べたが、そのとき念仏のことを語り合ったのが遊蓮房円照であり、そこで念仏したから、西山粟生光明寺のことを浄土根元地というのである。

然し、その比叡山を下った法然上人は、立教開宗の直後であるから、四十三歳のときと思うが、そのときここを訪ねたのが最初ではないので、二十四歳のときも一度この地にやってきている。

それは、釈迦釈迦堂に参籠したあと、この西山にきているのである。これはいつか書いたが、この西山にきたとき、茂

右衛門という人の家に草鞋をぬいだという伝説が今も粟生の光明寺に残っている。

粟生光明寺本山の寺務所の入口の手前、いわゆる西山短大の門の北側に、茂右衛門邸宅跡という碑が建てられているが、それがこの人の屋敷跡であるということである。

そこへ二十四歳の法然上人が、奈良に赴く途中立ち寄っているの、そのときに茂右衛門は

「あなたは立派な衆生済度の僧になることは、まちがいが無い。もしも立派な僧になれば必ず私を先に救済して欲しい」。

と若き日の法然上人に帰依したということである。

法然上人は、その親切心に心うたれて、この茂右衛門宅での接待をうけ、それより奈良に赴き、再び比叡山に帰って後、四十三歳で立教開宗の後、この茂右衛門との約束を果たすために、粟生の地を訪れ、茂右衛門にはじめて念仏の功德の偉大さを説くのであるが、はじめて念仏のおしえを人に説いたということで、茂右衛門への教化をもって、浄土根元地ということになるのである。

すると茂右衛門は、法然上人の信者第一号であって、あとにもさきにも、法然

上人に帰依した世俗の人としては、この茂右衛門より先に信者はいないといえる。

茂右衛門こそ、法然上人の将来を予言したという点では、なんとしてもその隠れた帰依者であったと思う。

ところが、その茂右衛門である。

立派に邸宅趾の記念碑は出来たけれど、一体いづれの人であるのだろうか。

いろいろな光明寺に関係のある資料を調らべてみたが、一向に手がかりがない。浄土宗関係の上人の伝記では、なおさら茂右衛門は出てこない。果たしてこのような人物が、どこにいたのだろうか、それが疑問である。

それでこの茂右衛門の邸宅趾の碑を発願した元西山浄土宗の管長で光明寺の法主であった京都の丹羽賢竜大僧正に、

「一体茂右衛門について、大僧正に顕彰されましたが、その伝記はどこにあるのでしょうか。」

と尋ねてみると、丹羽大僧正も首をか

しげたのである。

「それがね、一向にわからないのね。」

「そうですね、然しどこかに語りつたえられた記録があるのでしよう。」

という、丹羽大僧正は、

「実はわしはこの茂右衛門の話を関本諦承大僧正から聞いて、なんとか茂右衛門を顕彰するようにといわれていたので、それをやったまでである。」
というのが返事である。

関本諦承大僧正というのは、和歌山県の南部町の出身であり、近世の大徳で、光明寺本山の法主にも就任し、特に宗学においては権威の人であった。

その関本大僧正からのいつたえであつたらしいが、根拠は全くわからない。

ひよっとすると、西山開教の説教のなかにこの茂右衛門との出会いがあったことを説いたものであるとも考えられる。

それを耳にしている西山の人々はかなり多いので、それがこの茂右衛門の庄宅趾という碑を建てさせたことになる。

伝説や、民話は解剖しないほうがよいので、そうだからといって茂右衛門を解剖して、いろいろ調らべてみて、真実な資料が出てきたところで、その伝説は崩れ去るものでもない。古い歴史のなかに派生してくる、民族の美しい想像力の結果であるし、庭石に生える蒼い苔が、庭を一層古くみせるように、伝説はまたその人の人間性を豊かにする上にも大切なものである。

茂右衛門の邸宅の場所もわからない。おそらく今の記念碑のあたりも、架空な土地であるだろう。

それを詮策する必要もない。ただ素直に若き日の法然上人がこの道を通って、茂右衛門宅を訪れたであろうと想像するとき、心に自らあたたいものを感じる、それでよいのであると思う。

伝説の少ない法然上人の伝記であるが、茂右衛門との出会いには、なにかしら心のふれ合いを感じるのである。



浄土宗の国宝（Ⅰ）

知恩院三門

東山を背に宏壮雄麗なる摩天の大樓門、前面は桜馬場、両側の樹林を通して永い石段が続く。楼上からは京都を一望に見渡すことができる。数ある国宝、重文建築物の中の一つである。

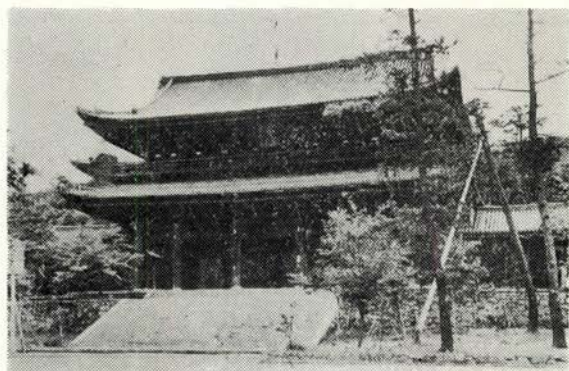
三門とは中央と左右の三つの門の相連なったもので、寺院を法、空、涅槃にたとえ三解脱門と称し空門、無相門、無作門を寺院の門にたとえていう。写真はその代表的なもので当代一と称されるもの。元和三年より徳川秀忠によって建立された。明治三十五年七月特別保護建造物に指定さる。

桁行十四間半、梁間六間半、高さ二十余段の石段上に

西面して建つ重層入母屋造、本瓦葺である。檀上西方正面軒下には靈元天皇の宸翰勅額（華頂山）が掲げられている。手法はすべて唐様に従い元和建築としては大きい。堂内は極彩色装飾がなされた豪華さである。上層天井の中央間には竜と雲、その左右間には雲中天人及び迦陵頻伽、両端間には楽器を散らした極彩をもって描かれている。また中央に梁した二条の大虹梁両側面には雲中を駆る靈獸、両端小虹梁には波浪を渡る飛竜、各虹梁端には牡丹、唐草など種々な模様を描かれている。中央須弥壇には宝冠をいたたく釈迦牟尼仏坐像、左右は善財童子、須達長者及び十六羅漢の木像が安置されている。その中において二牀の法体木像が目につく。当三門の大工棟梁五味金右衛門夫妻の坐像である。彼は建築に当り、土台に多量の木炭を使用するなど大工の名譽と、当代一の三門として永遠に存続する立派なものを建造するところから生命をかけた。従って多大な予算超過であった。そのため三門が竣工するや金右衛門は轄腹して、その責任をとった。知恩院三門が当代日本一といわれる由縁も、そうしたところにも起因する。この夫妻坐像はそうした五味金右衛門夫妻の菩提を弔うために安置されたものである。

（佐々木洋之）

〈知恩院三門〉



〈三門大工棟梁夫妻
の法体木像〉



「浄土」購読規定

一部 定価 百円
(送料十二円)

会費一カ年金一、二〇〇円
(送料 不要)

浄土 二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十八年一月二十五日 印刷
昭和四十八年二月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

戸川 霊俊 著

近刊 『若き日の軌跡』

大学の庭に宗教を説き哲学を講じて20有余年。東山沿いの哲学の小徑を逍遙しながら若人に語りかけし青春と人生との珠玉の随想集………一本を繙とかれたし

B六版 230頁 定価 800円 (〒140円)

京都 東山

発行所 初音書房

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三碩学
の名著 『浄土宗読本』 覆刻版

価 1000円 〒150円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教を日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

佐藤 治子 著

新刊 『旅日記』

アメリカ・シルクロード・インド篇

— 本誌に掲載した世界旅行の随篇を一冊の本にまとめてみました。「平凡な主婦の平凡な世界旅行」として気軽にお読みいただければ幸いです

四六版 320頁 単価 1,500円 (〒140円)

発行所 山喜房仏書林

御用のむきは本会までお申込み下さい。